恐怖・悲しみ表情の強度と援助動機・援助必要性判断

○嶺本和沙¹・中嶋智史¹・吉川左紀子^{2,1}

(¹京都大学大学院 教育学研究科・²京都大学 こころの未来研究センター)

キーワード: 表情・援助・動機

The influence of intensity of the fear and sad facial expression on the rating of the helping motivation and the helping demand.

Kazusa MINEMOTO¹ Satoshi NAKASHIMA¹ and Sakiko YOSHIKAWA^{2,1}

(¹Graduate School of education, Kyoto University, ²Kokoro Research Center, Kyoto University)

Key words: facial expressions, helping, motivation

目 的

私たちが日々の生活で用いている情動をあらわす顔の表情は、表出した人物に対する接近や回避など特定の対人行動を誘発する社会的信号である。重要な対人行動の1つである「他者への援助」に関わる表情を検討した先行研究において、中嶋ら(2009)は、恐怖表情に対する援助の必要性の評価は真顔(中性表情)よりも高く、悲しみ表情と同程度であるのに対し、援助動機(助けたいか否か)の評価は悲しみ表情の方が高いことを示した。Marsh & Ambady(2007)では、恐怖表情が知覚者の共感を引きだすことを示しており、表情によって喚起される適度な共感が援助動機や援助行動を左右する要因である可能性が考えられる。

そこで本研究では、恐怖と悲しみ表情に対する援助必要性(「今働きかけが必要か」と援助動機(「この人物を助けたいか」)の評定を行い、表出強度の違いがそれぞれの表情に与える影響を検討した。

方 法

参加者 大学生 26 名が実験に参加した。

刺激 日本人女性 5 名の恐怖・悲しみ・中性表情のカラー写真を使用して、実験刺激を作成した。各刺激人物の恐怖と悲しみの表情を中性の表情と合成して表情強度の弱い刺激を作成し、予備実験によって各人物「強い恐怖・弱い恐怖・強い悲しみ・弱い悲しみ」の 4 種類の刺激を選出した。刺激は 4 種類の表情刺激と中性表情を 5 名分使用し、計 25 枚であった。

手続き 個人実験で行った。最初に 25 枚の刺激写真がランダムに 1 度ずつ、自動的に提示された。続いて、「援助必要性」と「援助動機」を含む 8 項目うち、いずれか 1 つの項目の説明が提示され、参加者は画面の中央に 1 枚ずつ提示された表情写真について、それぞれ 7 件法(1; 全く必要だと思わない/全く助けてあげたくない~7; とても必要だと思う/とても助けてあげたい)で評定を行った。各評定項目は、すべて個別のブロックで実施された。

結 果

援助必要性和援助動機それぞれについて、恐怖表情(強・弱)、悲しみ表情(強・弱)、中性表情それぞれの評定平均値を従属変数とし 1 要因の分散分析を行った。援助必要性について、表情の主効果が有意であり($F(1, 129)=52.98, p<.001$)、下位検定の結果、中性表情は他の表情よりも評定値が低かった(いずれも $t>6.61, p<.001$)。恐怖表情と悲しみ表情のどちらとも、強度が弱い刺激よりも強い刺激の評定値が高くなった(いずれも $t>4.35, p<.001$)。援助動機について表情の主効果が有意であり($F(1, 129)=31.17, p<.001$)、下位検定の結果、中性表情は他の表情よりも評定値が低かった(いずれも $t>3.24, p<.001$)。悲しみ表情では、強度が弱い刺激よりも強い刺激の評定値が高くなった($t=2.96, p<.001$)が、恐怖表情で

図 1 各表情刺激に対する平均評定値
横軸: 表情刺激 縦軸: 評定値

は強度の強い刺激と弱い刺激の評定値に差は見られなかった($t=0.36, p>.10, n.s.$)。また、恐怖表情は悲しみ表情の強度の弱い刺激よりも評定値が低くなった(いずれも $t>3.66, p<.001$)。

考 察

本研究では、表情の強度が援助動機・援助必要性に与える影響を検討するために、恐怖表情と悲しみ表情の強度の異なる刺激を用いた評定実験を行った。

援助必要性についての評定結果から、恐怖表情、悲しみ表情ともに、中性表情に比べて援助が必要である表情であり、強度が強いほどより援助が必要であると判断された。一方、援助動機については、悲しみ表情は強度が強いほど援助動機が喚起されるのに対し、恐怖表情では表情強度の差異は援助動機に影響しなかった。このような違いは、恐怖表情が、援助の必要性を表す信号であると同時に、知覚者に対して、環境内に危険が存在することを表す脅威信号でもあることが関係しているのではないかと考えられる。恐怖表情については、強度の変化により援助の必要性が異なると判断されても、援助したいか否かの判断では、脅威の強さが強いと回避動機の方が強くなって、援助動機が抑制される可能性がある。

今後、他者に対して実際の援助行動が引き出される過程をより理解するために、各表情における強度の違いが喚起する共感の強さにおよぼす影響や、強度の異なる表情に対する接近回避行動を計測するなど、さらなる検討が必要である。

引用文献

中嶋・嶺本・吉川(2009). 援助動機における表情および視線方向の効果. *日本心理学会第 73 回大会発表論文集*, 708.
Marsh & Ambady(2007). The influence of the fear facial expression on prosocial responding. *Cognition and Emotion*, **21**, 225-247.